

## 準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響 —準拠枠としての仲間集団と学級集団—

The influence of norm on the tendency of bullying:  
Peer-group and class-group as a frame of reference

黒川 雅幸

大西 彩子

Masayuki KUROKAWA

Ayako ONISHI

(福岡教育大学教育学部)

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

(平成20年9月22日受理)

### 要 約

本研究の主な目的は、いじめに対する準拠集団がもつ規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響を明らかにすることであった。パス解析の結果、集団内いじめ、集団外いじめといったいじめの対象や、こらしめのいじめ、異質性排除のいじめ、享楽のいじめといったいじめの動機に関わらず、いじめに対する否定的な準拠集団規範は加害傾向を抑制することが示唆された。こらしめのいじめへの規範の影響は最も弱かったが、他のいじめ動機と大きな差はなく、準拠集団規範はこらしめのいじめをも抑制することが示唆された。中学生女子は小学生女子よりも、集団内いじめに関して、仲間集団を規範の準拠枠にしていることが多いことが示された。また、学級集団よりも仲間集団を準拠枠にしている女子は、集団内いじめ加害傾向が高いことも示され、学級にいる多くの生徒には気付かれずに行われる仲間内でのいじめが中学生女子において増加することが予測された。

キーワード：いじめ, 規範, 規範の準拠枠, いじめの対象, いじめの動機

### 問題と目的

いじめ被害に遭った子どもは、心理的ストレスを強く感じている(岡安・高山, 2000)。また、心的被害が大きい場合には、自殺企図や精神病、心身症、不登校などの問題も引き起こすことがあり(坂西, 1995; Rigby, 1998; 立花, 1990)、学校現場では発生のメカニズムを解明し、予防的措置を取って解決していくことが望まれる。しかしながら、いじめの発生件数は横這い状態にあり(文部科学省, 2006)、依然として問題の解決に至っていないのが現状であるといつても良いだろう。岡安・高山(2000)の調査においても、仲間はずれ・無視・悪口・嫌がらせ・いたずら、叩かれたり・蹴られたりといった被害経験を、週に1回以上経験している中学生が、1割程度いることが示されており、いじめが日常化していると言えるだろう。

いじめの発生件数を学年別に見てみると、小学校では高学年になるにつれて増加傾向にあり、中学校1年生でピークに達する。その後、中学校後半から高校にかけては減少傾向にある。いじめの発生件数が増加する時期の児童・生徒は、性格の類似や価値観の一致などにより、気のあった仲間と凝集性の高い集団を形成する(Rubin, Bukowski, & Parker, 1998)。仲間は児童・生徒にサポートを提供し(尾見, 1999)、精神的な安定を図るための支えとなる(岩立・岸・高橋, 1994)。しかし一方では、仲間集団がもつ同調や排他性などの問題も指摘されている(Brown, Eicher, & Petrie, 1986; 三島, 2003)。また、仲間集団成員の影響を受け、いじめや問題行動が促進されることもあると指摘されている(Espelage, Holt, & Henkel, 2003; Kiesner, Cadinu, Poulin, & Bucci, 2002)。

いじめには、周囲の生徒が影響を及ぼすことが明らかにされている (Atlas & Pepler, 1998; Gini, 2006; 森田, 1985; Salmivalli, Lagerspetz, Björkqvist, Österman, & Kaukiainen, 1996)。学級集団といじめとの関連に着目した研究では (森田, 1985), いじめは加害者, 被害者の2者のみではなく, いじめをはやしたてる観衆層の生徒と, そして, 見て見ぬふりをする傍観層の生徒も含めた者同士が相互に影響しあうことで生起することを明らかにしている。そこでは, いじめに許容的な学級は, 傍観層の生徒がいじめを活性化させる可能性があることを指摘している。いじめの定義では, いじめを行う者は複数であり (森田・清永, 1986), 複数の者がいじめを行う背景には, 仲間との同調行動がある (竹村・高木, 1988)。大西 (2007) では, 実際にいじめ行動を測定するのではなく, 場面想定法を用いて状況を設定したうえで, いじめへ参加する程度をいじめ加害傾向として測定し, 生徒のいじめ加害傾向といじめに対する学級規範との関連について検討している。その結果, いじめに対して否定的な規範がある学級では, より許容的な学級と比べて, 生徒のいじめ加害傾向が低いことを示している。これらの研究は, 同一所属集団の生徒がいじめを否定的に評価するか否か, すなわち, 集団規範の様態が生徒のいじめ加害行動に影響を与えることを示している。

児童・生徒は様々な集団に所属している。例えば, 学級, 仲間, 家庭, 塾, 部活などが挙げられる。児童・生徒の行動は, 所属している複数の集団の中から, 当該行動に関する適当な規範が選択され, 影響を受けていると考えられる。

児童・生徒の規範の準拠枠となる集団は, これまで検討されてきたような学級のみではないと考えられる。小学校高学年頃から仲間の目が気になり, 逸脱することを恐れ, 仲間と同じように振舞おうとすることが指摘されており (三島, 1995), 学級規範よりも仲間規範が重要となることも予測される。いじめに対して否定的な学級規範があったとしても, 仲間規範が許容的である場合, 仲間集団を準拠枠としている子どもはいじめを行ってしまうだろう。仲間への同調が最も高い中学生の方が (Strassberg, & Wiggen, 1973) 小学生よりも仲間集団を準拠枠にしていることが多い可能性は高く, 仲間集団を準拠枠としていることで, いじめを行ってしまう可能性がある。

そこで本研究では, 準拠枠として学級集団と仲間集団を考慮し, いじめに対する否定的な規範が

いじめ加害行動を抑制することを検証する。

森田・滝・秦・星野・若井 (1999) が行った調査では, いじめの被害生徒の約3割から4割が学級成員からいじめの存在を認知されていなかったことを報告している。この調査結果は, いじめが特定の関係内で行われ, それ以外の学級成員を巻き込まない場合もあることを示唆している。また, 三島 (2003) も, 無視や仲間はずれといった関係性攻撃を手段として相手に危害を加えるいじめが, 仲間集団内で頻繁に行われていることを指摘し, 仲間集団内いじめが存在することを示唆している。他方, いじめられる児童は仲間として選択されない社会的低地位者であり, 学級内の孤立児であることを示唆する研究もある (杉原・宮田・桜井, 1986)。つまり, 仲間集団以外の学級成員を対象にしたいじめが存在することを示唆している。これらの結果を踏まえると, いじめには仲間集団内いじめと仲間集団外いじめの2つのタイプがあると捉えることが可能である。仲間集団に所属していても, 仲間から拒否され, いじめを受けるタイプと, 仲間集団の成員ではない学級成員からいじめを受けるタイプである。

また, いじめには様々な動機が存在する。いじめの理由を検討した研究では (井上・戸田・中松, 1986), こらしめのいじめ, 異質性排除のいじめ, 享楽のいじめが存在することが明らかにされている<sup>1)</sup>。こらしめのいじめは, いじめられる側の者が直そうと思えば直せるのに直さないからといった理由を挙げ, いじめる側の者はいじめられる側に落ち度があると認識し, 制裁を下すために行われるいじめである。例えば, テストで100点をとったことを自慢して, テストを見せびらかした者や, 挨拶をしても返事をしない者に対して行われる。異質性排除のいじめは, 仲間関係の等質性を失わせる者を, 仲間から排除するいじめである。例えば, みんなと服装が違っていることを理由にいじめることがある。享楽のいじめは, いじめる側の恣意的ないじめである。いじめる側がもつストレスの発散や快楽を満たすことを目的としている。いじめに対する許容度では, こらしめのいじめが最も高く, 次に異質性排除, 享楽の順になることが示されている (井上他, 1986)。つまり, こらしめのいじめは, いじめているとの認識が低い。いじめが減少しない背景には, いじめに対する否

<sup>1)</sup> 井上・戸田・中松 (1986) では, 享楽のいじめは不条理のいじめと表現されていた。本研究では, 因子名を加害者の視点で統一する目的で表現を改めた。

定的な規範がこらしめのいじめに影響しにくいことが考えられる。

このように、同じいじめとラベルづけされていても、対象や動機によっていじめの構図や許容度が異なることが指摘されているにも関わらず、これらを考慮して検討している研究は少ない。そこで本研究では、いじめの対象や、いじめへの動機を考慮したうえで、準拠集団規範がいじめ加害行動に及ぼす影響を検討する。仮説は以下の通りである。1) いじめに対する否定的な準拠集団規範がいじめ加害行動を抑制するだろう。2) 小学生よりも中学生の方が、学級集団よりも仲間集団を規範の準拠枠にしていることが多いだろう。3) 仲間集団を規範の準拠枠にしている方が、学級集団を準拠枠にしているよりも、いじめ加害行動が高いだろう。

本研究では、いじめの発生件数が増加し始める小学校5年生から中学校2年生までを対象に、横断的に調査を行う。

### 方法

調査対象者 公立小学校の5年生40名、6年生58名（男子38名、女子60名）、公立中学校の1年生69名、2年生74名（男子71名、女子72名）の計241名であった。

手続き 2007年6月～7月に質問紙調査を担任教師の下で実施した。

質問紙の構成 (a) 仲間集団の人数：調査対象者と同じクラスの人の中で、「休み時間や昼休みをよく一緒に過ごしたり、教室移動をする時によく一緒に移動したりする人」の人数を質問した。(b) 集団内いじめに対する学級規範：大西・吉田(2007)を参考に作成した。「あなたが、毎日のように遊び仲間の1人を無視すること」「あなたが、毎日のように遊び仲間の持ち物に悪口を書くこと」「あなたが、毎日のように遊び仲間の1人の悪口をわざと大きな声で言うこと」「あなたが、毎日のように遊び仲間の1人を除け者にする」との4項目であり、これらの行動をとった場合に、クラスの多くの人たちの評価を推測させて回答させている。「かなりいいと思うだろう(1点)～すぐくまずいと思うだろう(7点)」の7段階評定で尋ねた。本研究で測定されるのは、回答者が知覚した規範である。遊び仲間とは、(a)で指す人のことであると教示した。(c) 集団外いじめに対する学級規範：クラスの多くの人たちが、仲間以外のクラスメイトをいじめることについてどのように思っているかを推測させて回答させている。(b)

集団内いじめに対する学級規範において使用した質問項目の「遊び仲間」を「遊び仲間以外のクラスの1人」に置き換えている。「かなりいいと思うだろう(1点)～すぐくまずいと思うだろう(7点)」の7段階評定で尋ねた。(d) 集団内いじめに対する仲間規範：(b) 集団内いじめに対する学級規範と同様の内容を使用し、仲間集団の一員をいじめることを仲間がどのように思っているかを推測させて回答させている。「かなりいいと思うだろう(1点)～すぐくまずいと思うだろう(7点)」の7段階評定で尋ねた。(e) 集団外いじめに対する仲間規範：(c) 集団外いじめに対する学級規範と同様の内容を使用し、仲間以外のクラスメイトをいじめることを仲間がどのように思っているかを推測させて回答させている。「かなりいいと思うだろう(1点)～すぐくまずいと思うだろう(7点)」の7段階評定で尋ねた。(f) 集団内いじめに対する規範の準拠枠：「あなたが、毎日のように遊び仲間の持ち物に悪口を書いたならば・・・」のように、仲間をいじめてしまった場合を仮定し、その時に仲間の目が気になるか、それとも学級にいる多くの人の目が気になるかを強制選択(2件法)により質問した。(g) 集団外いじめに対する規範の準拠枠：仲間以外のクラスメイトをいじめてしまった場合を仮定し、その時に仲間の目が気になるか、それとも学級にいる多くの人の目が気になるかを強制選択(2件法)により質問した。(b)～(g)の質問は各4項目であり、それぞれ内容が対応している。(h) 類型別いじめ加害傾向：いじめの対象(仲間集団内、仲間集団外)、いじめの動機(こらしめ、異質性排除、享楽)の6つの組み合わせに対して、それぞれ4つのストーリーを作成した(Appendix)。仲間からいじめに加わるような誘いを受けた場合、いじめに加わるかどうかを質問している。仮想場面を用いて加害傾向を測定した。「すると思う(4点)～しないと思う(1点)」の4段階評定で尋ねた。

### 結果

#### 各変数の分析結果

仲間集団の人数 仲間を0人と回答したもの(2名)は、仮説検証に関わる分析から除外した。また、欠測値がある者はその都度分析から除外した。

集団内いじめに対する学級規範 4項目による内的整合性は $\alpha=.94$  ( $n=233$ )であり、合計得点を算出し、それを集団内いじめに対する学級規範の得点とした。平均値は25.43 ( $SD=4.15$ )であっ

た。得点が高いほど、いじめに否定的な規範がある。

**集団外いじめに対する学級規範** 4項目による内的整合性は $\alpha=.96$  ( $n=235$ )であり、合計得点を算出し、それを集団外いじめに対する学級規範の得点とした。平均値は24.83 ( $SD=4.84$ )であった。得点が高いほど、いじめに否定的な規範がある。

**集団内いじめに対する仲間規範** 4項目による内的整合性は $\alpha=.96$  ( $n=231$ )であり、合計得点を算出し、それを集団内いじめに対する仲間規範の得点とした。平均値は25.86 ( $SD=3.76$ )であった。得点が高いほど、いじめに否定的な規範がある。

**集団外いじめに対する仲間規範** 4項目による内的整合性は $\alpha=.97$  ( $n=233$ )であり、合計得点を算出し、それを集団外いじめに対する仲間規範の得点とした。平均値は24.72 ( $SD=5.02$ )であった。得点が高いほど、いじめに否定的な規範がある。

**集団内いじめに対する規範の準拠枠** 学級にいる多くの人の目が気になると回答されたものを0点、仲間の目が気になると回答されたものを1点と得点化した。4項目によるKuder-Richardsonの公式20 (KR-20)は $\alpha=.81$  ( $n=232$ )であり、合計得点を算出し、それを集団内いじめに対する規範の準拠枠得点とした。得点が高いほど仲間集団を準拠枠にしていることが多く、得点が低いほ

Table 1  
類型別いじめ加害傾向の統計量

いじめの動機	こらしめ		異質性排除		享楽	
	集団内	集団外	集団内	集団外	集団内	集団外
平均値( $M$ )	7.7	7.2	6.2	6.1	5.9	5.2
標準偏差( $SD$ )	3.1	3.2	2.4	2.7	2.3	2.6
内的整合性( $\alpha$ )	.86	.91	.82	.87	.83	.90
標本( $n$ )	236	237	238	240	238	239

Table 2  
いじめに対する規範と類型別いじめ加害傾向の性差と学校種別差

	小学生		中学生		性別 主効果 $F$ 値	学校種 主効果 $F$ 値	交互作用 $F$ 値
	男子 $M(SD)$ $n$	女子 $M(SD)$ $n$	男子 $M(SD)$ $n$	女子 $M(SD)$ $n$			
集団内いじめへの学級規範	0.78(0.16) 35	0.81(0.14) 59	0.60(0.19) 69	0.63(0.21) 70	1.01	53.16**	0.01
集団外いじめへの学級規範	0.80(0.15) 36	0.81(0.14) 59	0.56(0.23) 70	0.58(0.23) 70	0.23	78.63**	0.05
集団内いじめへの仲間規範	0.80(0.09) 36	0.83(0.06) 58	0.61(0.19) 66	0.67(0.23) 71	3.38 <sup>+</sup>	58.52**	0.61
集団外いじめへの仲間規範	0.80(0.11) 36	0.83(0.06) 58	0.53(0.25) 69	0.58(0.25) 70	1.86	92.59**	0.11
集団内・こらしめのいじめ加害傾向	0.76(0.16) 37	0.71(0.14) 60	0.95(0.14) 69	0.92(0.16) 70	4.82*	97.09**	0.16
集団外・こらしめのいじめ加害傾向	0.72(0.16) 37	0.67(0.12) 60	0.91(0.18) 69	0.89(0.17) 71	2.61 <sup>+</sup>	90.26**	0.14
集団内・異質性排除のいじめ加害傾向	0.65(0.10) 37	0.63(0.08) 60	0.85(0.13) 70	0.83(0.15) 71	1.25	148.55**	0.01
集団外・異質性排除のいじめ加害傾向	0.64(0.85) 37	0.62(0.06) 60	0.85(0.16) 71	0.82(0.16) 72	1.53	133.81**	0.03
集団内・享楽のいじめ加害傾向	0.67(0.10) 37	0.63(0.06) 60	0.82(0.15) 70	0.79(0.16) 71	4.45*	79.26**	0.11
集団外・享楽のいじめ加害傾向	0.64(0.09) 37	0.61(0.04) 60	0.82(0.17) 70	0.79(0.17) 72	2.21	95.82**	0.10

<sup>+</sup>  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

ど、学級集団を準拠枠としていることが多いことを示している。平均値は2.09 ( $SD = 1.57$ )であった。

集団外いじめに対する規範の準拠枠 学級にいる多くの人の目が気になると回答されたものを0点、仲間の目が気になると回答されたものを1点と得点化した。4項目によるKuder-Richardsonの公式20 (KR-20)は $\alpha = .86$  ( $n = 233$ )であり、合計得点を算出し、それを集団外いじめに対する規範の準拠枠得点とした。得点が高いほど仲間集団を準拠枠にしていることが多く、得点が低いほど、学級集団を準拠枠にしていることが多いことを示している。平均値は0.72 ( $SD = 1.29$ )であった。

類型別いじめ加害傾向 いじめの対象といじめの動機により、6つのいじめに類型化した。6つの類型別いじめ加害傾向はそれぞれ4項目で構成されているが、各4項目での内的整合性はいずれも $\alpha > .80$ であり、十分であった。そこで、6つのいじめに関して、それぞれ4項目を合計していじめ加害傾向得点とした (Table 1)。

#### 変数間の関係

いじめに対する規範と加害傾向における性差および小学生と中学生の差 いじめに対する規範と加害傾向に関する性差および小学校5・6年と中学校1・2年の差を検討するため、性別と学校種別を独立変数、いじめに対する規範と加害傾向を従属変数とする被調査者間2要因分散分析を行った (Table 2)。ただし、いじめに対する規範と加害傾向は分布の偏りがあるため、対数変換を行い、以降の分析ではその値を用いた<sup>2)</sup>。集団内いじめ、集団外いじめに関わらず、いじめに対する学級規範得点や仲間規範得点は小学生の方が有意に高かった。つまり、小学生の方が中学生よりも、いじめに対する学級規範や仲間規範は否定的であり、いじめは悪いことであるとより強く認識されていることになる。また、いじめの動機別の加害傾向も、全ての動機において、中学生の方が小学生よりも高かった。中学生の方が小学生よりも、動機に関わらず、いじめの加害者になりやすい傾向にある。これらの結果は、いじめの発生件数の推移 (文部科学省, 2006) と整合している。性差に関しては、集団内・こらしめのいじめと集団内・享楽のいじめにおいて、いずれも男子の方が女子よりも有意に高かった。

いじめに対する準拠集団規範得点の算出 いじめに対する準拠集団規範得点は、集団内いじめ・集団外いじめともに、質問紙の構成(f)および(g)の

いじめに対する規範の準拠枠において、クラスの多くの人の目が気になると回答した場合は、対応する質問紙の構成(b)(c)の学級規範の得点を用い、仲間の目が気になると回答した場合は、対応する質問紙の構成(d)(e)の仲間規範の得点を用いて、その合計点とした。なお、以降の分析では、いじめに対する規範と同様な方法で変換を行った値を用いた。

いじめの動機の違いによる加害傾向の差 こらしめのいじめは、異質性排除のいじめや享楽のいじめよりも加害傾向が高くなることを検証するために、被調査者内1要因分散分析を行った。集団内いじめに関しても [ $F(2, 418) = 141.79$  ( $p < .01$ )], 集団外いじめに関しても [ $F(2, 345) = 93.80$  ( $p < .01$ )] 有意差が得られた。下位検定の結果 (Bonferroniの検定), 全ての水準間において0.1%水準で有意な差が見られ、集団内いじめでは、こらしめのいじめ加害傾向が最も高く ( $M = 0.85$ ,  $SD = 0.18$ ), 次いで異質性排除のいじめ ( $M = 0.76$ ,  $SD = 0.16$ ), 享楽のいじめ ( $M = 0.74$ ,  $SD = 0.15$ ) の順であった。集団外いじめにおいても、こらしめのいじめ加害傾向が最も高く ( $M = 0.81$ ,  $SD = 0.19$ ), 次いで異質性排除のいじめ ( $M = 0.75$ ,  $SD = 0.16$ ), 享楽のいじめ ( $M = 0.73$ ,  $SD = 0.16$ ) の順であった。これらの結果は、井上他 (1986) と整合し、いじめの対象が集団内・集団外に関わらず、こらしめのいじめが最も起こりやすいことが示された。

仮説の検証 調査対象とした学年では、性差が予測されるので、以降の分析は性別ごとに行った。

仮説1の検証 (集団内・集団外いじめに対する否定的な規範がいじめ加害傾向を抑制する効果)

パス解析を行い、いじめに対する準拠集団規範が加害傾向に及ぼす影響について検討を行った (Figure 1~4)。男女ともに、いじめの対象や動機に関わらず、否定的な準拠集団規範はいじめ加害傾向を抑制する可能性があることが示唆された。したがって、仮説1は支持された。また、こらしめのいじめへの否定的な準拠集団規範の影響も示された。

<sup>2)</sup> いじめ加害傾向得点の分布は歪度が正であり、低得点が多いため、対数変換を行った。一方、いじめに対する規範得点は歪度が負であり、高得点が多いため、レンジの最大値である28より大きい値 (本研究では32とした) から差をとり、その値を対数変換した。そして、算出された値の最大値である1.45から差をとることで、32から引いたことによる得点順の変化を戻す操作を行った。

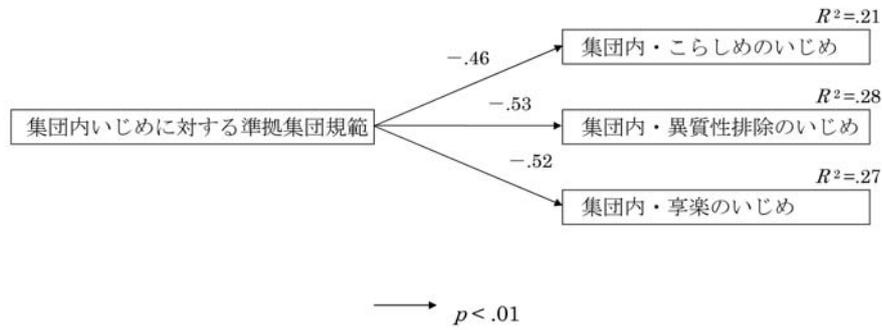


Figure 1 集団内いじめに対する準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響（男子）

注) 従属変数への誤差は表記を省略している

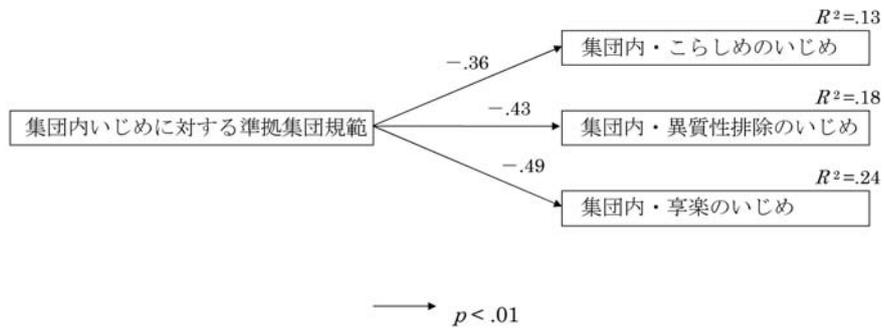


Figure 2 集団内いじめに対する準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響（女子）

注) 従属変数への誤差は表記を省略している

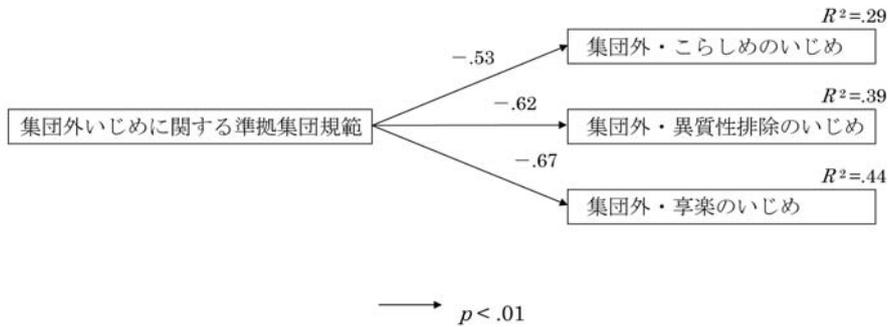


Figure 3 集団外いじめに対する準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響（男子）

注) 従属変数への誤差は表記を省略している

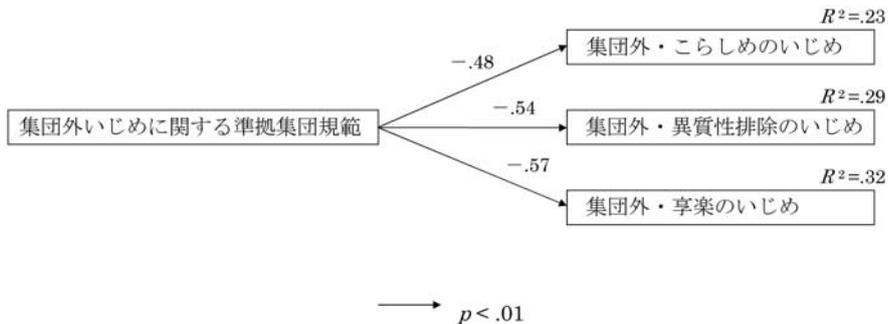


Figure 4 集団外いじめに対する準拠集団規範がいじめ加害傾向に及ぼす影響（女子）

注) 従属変数への誤差は表記を省略している

仮説2の検証（いじめに対する規範の準拠枠の移行） いじめに対する規範の準拠枠の移行について検討するために、小学校5・6年生と中学校1・2年生の比較を行った。男子では、集団外いじめと集団内いじめの両方で、いじめに対する規範の準拠枠に違いはなかった（Table 3）。一方で、女子では、集団外いじめでは違いがなかったが、集団内いじめでは小学生と比較して、中学生の方が学級集団よりも仲間集団を準拠枠にしていることが多いことが示された。したがって、女子の集

団内いじめに関してのみ、仮説2は支持された。

仮説3の検証（いじめに対する規範の準拠枠と加害傾向との関連） いじめに対する規範の準拠枠と加害傾向との関連をみるため、集団内・集団外いじめのそれぞれに対して、学級集団準拠群と仲間規集団準拠群に分けた。いじめに対する規範の準拠枠の質問項目は4項目であり（レンジ：0点～4点）、得点が高いほど、仲間集団を準拠枠にしていることが多いことを示している。そこで、0点と1点を学級集団準拠群、3点と4点を仲間

Table 3  
いじめに対する規範の準拠枠得点の比較

		小学生 <i>M(SD)</i> <i>n</i>	中学生 <i>M(SD)</i> <i>n</i>	<i>df</i>	<i>t</i> 値
集団外いじめ	男子	0.83(1.42) 35	0.89(1.35) 70	103	0.20
	女子	0.46(1.01) 59	0.72(1.37) 69	123	1.27
集団内いじめ	男子	2.31(1.57) 35	2.13(1.55) 70	103	0.56
	女子	1.49(1.60) 59	2.47(1.43) 68	125	3.64**

\*\*  $p < .01$

Table 4  
規範の準拠枠の違いによるいじめ加害傾向の差

		仲間集団準拠群 <i>M(SD)</i> <i>n</i>	学級集団準拠群 <i>M(SD)</i> <i>n</i>	<i>df</i>	<i>t</i> 値
集団内・こらしめのいじめ加害傾向	男子	0.86(0.18) 49	0.91(0.17) 32	79	1.20
	女子	0.86(0.18) 49	0.76(0.17) 50	97	3.02**
集団内・異質性排除のいじめ加害傾向	男子	0.79(0.16) 50	0.77(0.16) 32	80	0.38
	女子	0.78(0.17) 50	0.69(0.14) 50	94	2.75**
集団内・享楽のいじめ加害傾向	男子	0.77(0.16) 50	0.76(0.15) 32	80	0.38
	女子	0.76(0.17) 50	0.68(0.12) 50	89	13.45**
集団外・こらしめのいじめ加害傾向	男子	0.76(0.18) 16	0.87(0.19) 78	92	1.92 <sup>+</sup>
	女子	0.82(0.18) 16	0.79(0.18) 108	122	0.69
集団外・異質性排除のいじめ加害傾向	男子	0.76(0.19) 16	0.78(0.17) 79	93	0.38
	女子	0.78(0.19) 16	0.72(0.15) 108	18	1.27
集団外・享楽のいじめ加害傾向	男子	0.80(0.16) 16	0.77(0.15) 78	92	0.66
	女子	0.78(0.19) 16	0.70(0.14) 108	18	1.61

<sup>+</sup>  $p < .10$  \*\*  $p < .01$

集団準拠群とした。男子では、仲間集団内いじめに関して学級集団準拠群は32名、仲間集団準拠群は51名であり、その人数差には有意差がみられた [ $\chi^2(1) = 4.35, p < .05$ ]。仲間集団外いじめについては、学級集団準拠群は79名、仲間集団準拠群は16名であり、その人数差には有意差がみられた [ $\chi^2(1) = 41.78, p < .01$ ]。女子では、仲間集団内いじめに関して学級集団準拠群は50名、仲間集団準拠群は50名であり、その人数差は有意ではなかった [ $\chi^2(1) = 0.00, n.s.$ ]。仲間集団外いじめについては、学級集団準拠群108名、仲間集団準拠群は16名であり、その人数差には有意差がみられた [ $\chi^2(1) = 68.26, p < .01$ ]。集団内いじめに関しては、学級集団準拠群と仲間集団準拠群がおよそ半数ずつであったが、集団外いじめに関しては、学級集団準拠群がほとんどであった。

男子では、集団内いじめ・集団外いじめともに、仲間集団準拠群と学級集団準拠群において、加害傾向の差はほぼみられなかった (Table 4)。一方女子では、集団外いじめに関しては、仲間集団準拠群と学級集団準拠群において、加害傾向の差はみられなかったが、集団内いじめに関しては、学級集団準拠群より仲間集団準拠群の方が、いじめ加害傾向が高いことが示された。したがって、仮説3は一部支持された。

### 考察

いじめの発生件数は横這い状態にあり (文部科学省, 2006), 依然として問題は解決されていない。いじめは児童・生徒が精神的健康を損ねるだけでなく、不登校や自殺といった問題を引き起こす場合もあるにも関わらず、十分な検討はなされていない。

いじめに周囲の生徒が影響を及ぼすという結果 (Atlas & Pepler, 1998; Gini, 2006; 森田, 1985; Salmivalli, *et. al.*, 1996) を踏まえて、これまでの研究では、いじめへの否定的な学級規範がいじめを抑制する効果があることが検証されてきた (大西, 2007)。しかし、いじめに関する規範の準拠枠となる集団は必ずしも学級集団だけではないと考えられる。小学校高学年頃から、児童は仲間集団を形成し (Rubin, *et. al.*, 1998), 仲間の目を気にするようになるので (三島, 1995), 仲間集団に準拠している場合もあるだろう。いじめに対して否定的な学級規範があったとしても、許容的な仲間規範に準拠していたならば、いじめに許容的になることが予測される。そこで本研究では、学級規範得点および仲間規範得点と規範の準拠枠

の指標から準拠集団規範を測定した。なお、集団外いじめや集団内いじめといった対象による違いや、こらしめるため、異質な者を排除するため、ただ楽しむためといった動機による違いも考慮して、それらを分けて検討した。分析結果から、いじめに対する否定的な準拠集団規範はいじめの対象や動機に関わらず、加害傾向を抑制することが示された。この結果は、いじめ加害行動が起こるのは加害者のもつ攻撃性や共感性といった個人特性だけの問題ではなく、児童・生徒が準拠する集団の様態に依存することを示唆するものである。したがって、いじめを未然に防ぐための1つの方法として、準拠する集団規範を変えていくことが考えられよう。松尾 (2002) では、いじめを抑制するための様々な方法が紹介されている。その中で、教師が直接働きかけるのではなく、児童・生徒にいじめの相談や止めに入る役割を与えることで間接的に働きかける方法が取り上げられている。この方法は、規範を変容させるのに役立つと考えられる。学級内に存在する複数の仲間集団それぞれからピア・サポーターなどの役割を選出されるように教師が配慮すれば、役割をもった人物を中心に活動が展開され、いじめ加害行動への否定的な規範をそれぞれの仲間集団に広げていくことができ、さらには学級集団全体に強い抑制力をつくりあげていくことができると思われる。

いじめ加害傾向を動機別にみたところ、こらしめのいじめ加害傾向が最も高く、次いで異質性排除のいじめ、享楽のいじめの順であった。井上他 (1986) で測定されたいじめの許容度でも、こらしめのいじめは最も許容されるいじめであった。こらしめのいじめは、加害者にいじめをしたという認識がない。むしろ、裁いたと認識し、正しいことを行ったとさえ感じることもあるという。人間関係、人数、いじめとなった背景、いじめの形態などによって、いじめと認識されにくい場合があると指摘されていることから (笠井, 1998), いじめに対する具体的な共通認識をもつことが、こらしめのいじめを未然に防ぐことに繋がるだろう。こらしめのいじめは、準拠集団規範による影響でも抑制することが困難であると予測したが、異質性排除のいじめや享楽のいじめを抑制する影響力と大きな差はなかった。準拠集団規範の影響は、こらしめのいじめをも抑制できる可能性が示唆された。

中学校女子の方が小学校女子よりも、集団内いじめに対する規範は、仲間集団を準拠枠にしていることが多いことが明らかとなった。また、女子

の集団内いじめに関して、仲間集団を準拠枠にしている者は、学級集団を準拠枠にしている者よりも、いじめ加害傾向が高いことが示された。中学生になると、女子は集団内いじめについて、仲間の目しか気にならないような環境が作られ、その中でいじめが行われるようになっていくと予測できる。森田他(1999)の報告で、被害生徒が学級成員からいじめられていることを認知されていない結果は、女子において多く起きていると予測することができる。女子の集団内いじめを未然に防ぐためには、女子の仲間集団を閉じた関係にするのではなく、開かれた関係にして、準拠枠が仲間集団に偏らないように配慮する必要があると考えられる。仲間集団を開かれた関係にすることで、集団内いじめが起きた場合に、他の学級成員に認知されやすくなったり、仲間集団以外の学級成員に助けを求めたりすることができるようになる。場合によっては、他の仲間集団に移動することも可能となり、いじめを受けることを回避することができる。

近年、社会的逸脱行動に対して罪悪感が注目されている(e.g., 高井, 2004)。罪悪感は他者への配慮が不足した時や、他者への負い目を感じる時に経験されると指摘されており(有光, 2006)、仲間規範や学級規範から逸脱した行動をとることは、その心理的メカニズムにおいて、罪悪感が喚起されていると考えられる。今後は、規範からの逸脱が罪悪感を喚起し、いじめ行動に影響する過程を検討していく必要があるだろう。

本研究では準拠集団規範を説明変数、いじめ加害傾向を基準変数として分析を行ったが、逆の因果関係も考えられる。いじめ加害傾向が高い子どもは、いじめに対する規範を許容的に解釈してしまいがちであるといった加害者の認知に問題があるとする考え方である。攻撃性が高い子どもは社会的情報処理に問題があると指摘されており(坂井・山崎, 2004)、いじめ加害者においても、規範の解釈における認知的歪曲が生じているかもしれない。

#### 引用文献

有光興記(2006). 罪悪感, 羞恥心と共感性の関係 心理学研究, **77**, 97-104  
Atlas, R. S., & Pepler, D. J. (1998). Observations of bullying in the classroom. *Journal of Educational Research*, **92**, 86-99.  
坂西友秀(1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者

認知の差 社会心理学研究, **11**, 105-115.  
Brown, B., Eicher, S. A., & Petrie, S. (1986). The importance of peer group ("crowd") affiliation in adolescence. *Journal of Adolescence*, **9**, 73-96.  
Espelage, D. L., Holt, M. K., & Henkel, R. R. (2003). Examination of peer-group contextual effects on aggression during early adolescence. *Child Development*, **74**, 205-220.  
Gini, G. (2006). Bullying as a social process: The role of group membership in students' perception of inter-group aggression at school. *Journal of School Psychology*, **44**, 51-65.  
井上健治・戸田有一・中松雅利(1986). いじめにおける役割 東京大学教育学部紀要, **26**, 89-106.  
岩立京子・岸学・高橋道子(1994). 小学校における友人形成過程の分析—6年間における社会的地位指数の変化とコンピテンスおよび教師評価との関係— 東京学芸大学紀要(第1部門), **45**, 275-286.  
笠井孝久(1998). 小学生・中学生の「いじめ」認識 教育心理学研究, **46**, 77-85.  
Kiesner, J., Cadinu, M., Poulin, F., & Bucci, M. (2002). Group identification in early adolescence: Its relation with peer adjustment and its moderator effect on peer influence. *Child Development*, **73**, 196-208.  
松尾直博(2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向—学校・学級単位での取り組み— 教育心理学研究, **50**, 487-499.  
三島浩路(1995). 集団内いじめの予防と解消 特別活動研究, **28**, 50-53.  
三島浩路(2003). 親しい友人間に見られる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究, **19**, 41-50.  
文部科学省(2006). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省 2006年12月25日  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/12/07060501/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/12/07060501/001.pdf)> (2007年9月6日)  
森田洋司(1985). 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, **836**, 35-39.  
森田洋司・清永賢二(1986). いじめ—教室の病い— 金子書房  
森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一

- (編著) (1999). 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集— 金子書房
- 岡安孝弘・高山巖 (2000). 中学生におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- 尾見康博 (1999). 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.
- 大西彩子 (2007). 中学校のいじめに対する学級規範が加害傾向に及ぼす効果 カウンセリング研究, 40, 199-207.
- 大西彩子・吉田俊和 (2007). 中学生のいじめ加害傾向に影響を与える要因の検討—集団規範の影響に着目して— 日本グループ・ダイナミクス学会第54回大会発表論文集, 80-81.
- Rigby, K. (1998). The relationship between reported health and involvement in bully/victim problems among male and female secondary school children. *Journal of Health Psychology*, 3, 465-476.
- Rubin, K. H., Bukowski W., & Parker, J. G. (1998). Peer interactions, relationships, and groups. In W. Damon, & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology; social emotional and personality development*. Vol.3. New York: Wiley. Pp.619-700.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生における3つのタイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予期に及ぼす影響 教育心理学研究, 52, 298-309.
- Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A. (1996). Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group. *Aggressive Behavior*, 22, 1-5.
- Strassberg, D. S., & Wiggen, E. (1973). Conformity as a function of age in preadolescents. *The Journal of Social Psychology*, 91, 61-66.
- 杉原一昭・宮田敬・桜井茂男 (1986). 「いじめっ子」と「いじめられっ子」の社会的地位とパーソナリティ特性の比較 筑波大学心理学研究, 8, 63-72.
- 立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発祥した精神障害について 精神神経学雑誌, 92, 321-342.
- 高井弘弥 (2004). 道徳的違反と慣習的違反における罪悪感と恥の理解の分化過程 発達心理学研究, 15, 2-12.
- 竹村和久・高木修 (1988). “いじめ現象”に関する心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究, 36, 57-62.

#### 謝辞

英文アブストラクトに関して、野上達也さんのご助言を賜りました。ここに記して謝意を表します。また、調査を引き受けて頂いた実施校の先生方や児童・生徒の皆さんに深くお礼申し上げます。

## Appendix

### いじめ加害傾向のストーリー例

#### ■ 集団外・こらしめのいじめ

Kの遊び仲間は、何度もクラスメイトのLのノートに、Lの悪口を落書きしています。そしてKにもLのノートに悪口を書くように誘ってきました。(KとLはクラスメイトで、遊び仲間ではありません)

Lの悪口を落書きしている遊び仲間の理由は、

「Lは他の子をいじめたことがあり、いじめられる気持ちを知るべきだから」です。

あなたがKなら、遊び仲間と一緒にLのノートに悪口を書くと思いますか？

#### ■ 集団内・異質性排除のいじめ

Gが遊び仲間と帰ろうとすると、遊び仲間の何人かが、本人にわざと聞こえるようにHの悪口を言っています。H以外の遊び仲間は、Gにも一緒に悪口を言おうと誘ってきました。(HもGの遊び仲間です)

Hの悪口を言っている遊び仲間の理由は、

「Hはみんなと違って、動作が遅いから」です。

あなたがGなら、遊び仲間と一緒にHの悪口を言うと思いますか？

#### ■ 集団外・享楽のいじめ

Iの遊び仲間は、クラスメイトのJをクラスの中で除け者にしようとしています。そして、IにもJとはかかわらないように言ってきました。(IとJはクラスメイトで遊び仲間ではありません)

Jをクラスから除け者にしようとする遊び仲間の理由は、

「みんなから除け者にされた時のJの反応がおもしろいから」です。

あなたがIなら、遊び仲間と一緒にJを除け者にすると思いますか？

---

The influence of norm on the tendency of bullying: Peer-group and class-group as a frame of reference

Masayuki KUROKAWA (Faculty of Education, Fukuoka University of Education)

Ayako ONISHI (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

The purpose of the study was to reveal the influence of reference group norm on the tendency of bullying. Path analyses found that the reference group norm restrained bullies, regardless of whether the bullying target was a peer or non-peer and regardless of whether the motive to bully was for punishment, the exclusion of the heterogeneous from the group, or mere enjoyment. The influence of norm on punishing bullies was the weakest, but it was not much different from the other two motives. Consequently, the reference group norm even restrained punishing bullies. It was shown that junior high school girls referred to the peer-group more frequently than elementary school girls regarding bullies among peers. Another result showed that girls who referred to the peer-group more frequently than class-group had a higher tendency of bullying among peers. Therefore, it was predicted that bullies among peers that were not noticed by many students in the class would increase among junior high school girls.

**Keywords :** bully, norm, frame of reference on norm, bullying target, bullying motive

